

教員は語る

Professor Interview

美術学部デザイン科機能・
演出研究室 教授

尾登誠一

美術学部絵画科油画 教授

坂口寛敏

学部の四年間、同じ山岳部で

厳しい訓練と楽しい山の時間とを、

共に過ごした尾登教授と坂口教授――

お二人とも、山での得がたい経験が、

創造活動に深くかかわっていると吐露する。

山岳部の厳しい訓練

坂口 尾登先生も僕も、一九六九年に入学してすぐ山岳部に入って、山にも何回か一緒に登りましたね。

尾登 剣岳で迷ってしまいました。

坂口 そう、私たちが新人のときの剣岳夏山合宿でした。四年生たちがリーダーで大勢の一年生新人を引き連れ、午前は三ノ窓の雪渓で雪上訓練を行い、午後は各パーティーに分かれて、それぞれ違ったルートからベースキャンプに帰ることになっていたんですね。午後になると土砂降りの雷雨になった。ちょっとした切れ間ができたので、私たちのリーダーだった佐藤一郎さんが「行くぜー」と言っ

て、私たちのグループだけ歩きはじめたんですが、霧も出て道に迷ってしまい、夕方近くまでさまよってから下りてきました。急峻な雪渓の下方で滝の音がして、足を滑らすともうだめ、といった

相当危ない状態でした。その後、佐藤さんと私は油画の教員になり、ちょっと待てよ、と慎重になるのが私の役目になりました（笑）。

尾登 救援隊というか、暗い中、仲間が迎えに来ましたよね。

坂口 その前五く六月に三ツ峠の岩山で合宿したり。

尾登 富士山での雪上訓練、滑落停止のトレーニングも一緒だった。

坂口 冬山に必要な技術を習得するため、十一月から十二月にかけて富士山の吉田大沢で合宿があった、これがまた厳しい。基本的な技術は一年半ほどやりましたね。

尾登 それから当時、音楽学部キヤンパスの奥のほうにレンガ棟の部室があって、その外壁の周りを岩壁トラバースに見立てて、登攀の基本動作である三点確保でグルグル這っていた。

坂口 レンガの壁には、手の指が入るぐらいの穴を先輩たちが掘っ





てある。で、壁の下にある石組みに足を置いて、壁の穴に手をかけてカニのように横這いで何周も回るんです。

尾登 ザックの中にレンガを詰めて、階段を上ったり下りたりのカトレーニングもありました。

坂口 不忍池のほうまで一周マラソンして、途中の神社の階段をダツと駆け上がったたり、体力づくりですね。授業が終わると部屋に集まってはこうした訓練をしました。僕はロッククライミングが好きでしたから、ひたすらカニで(笑)。

恐ろしい山の事故

尾登 富士山の五合目にテントを

張ったときはすごかった。強風にあおられて鉄の大鍋がボンと吹き飛ばされるんですよ。登っていても突風で体がフワッと浮く。午後になると雪がシャーベット状になってアイゼンも効かない。そんな折、プロのスキーヤーがアイゼンワークに失敗して頂上から滑落したことがあって、藝大の山岳部に協力要請がありました。冬場の富士山は本当に怖いですよ。

坂口 あれは三年生ぐらいだったかしらね。富士吉田から登って五合目の佐藤小屋のところ、森林限界とあって、そこへ出るとすごい風なんです。風が通り過ぎるまで待つて上がってみると、もういつかテントごと飛ばされていく、

相当な事故だったですね。

尾登 集中豪雨も怖いですが。テントは水場に近いところに張るでしょう。ところが山の雨はいわゆる鉄砲水となって、あつという間に水かさが増える。

坂口 僕らも経験していますね。黒部川から唐松岳のルートで中洲にテント張っていて寝ていると、ゴロンゴロンと音がするので目を覚ますとすごい濁流になっていて、こっちに水がやって来る。危うく流れの弱いところから向こう岸に飛びのいて、助かりました。

尾登 山ではいろいろな状況判断が必要ですね。気象図による天候把握は原則ですが、やはり現場での勘が必要になってくる。山で経

験を積むということは、勘を研ぎ澄ますことだと思っんです。

坂口 僕がリーダーをした経験でいうと、事例の勉強も大事ですね。どういうルートをとったときに雪崩に遭っているか、どんな状況で土砂災害に遭っているか。ほかの山岳会などの遭難報告書を見ると、とても勉強になります。

時代に反抗して山岳部へ

尾登 僕の高校時代は、美術部長でありながらスポーツが好きで、山も難しいものよりは沢登りなどをよくやっていました。

坂口 僕も福岡の出身なのでそんなに高い山に登ったことはなかった。ただ、藝大に入って自由に芸術をやる前に、何か生死にかかわる体験をしないと何もわからないんじゃないか、っていう思いがあったんです。当時の学生運動なども半分足を突っ込んでいたりしたので、いきなり芸術をやるなんてとんでもないと。体を鍛えて命がけで何かやらないと、と思って厳しい山岳部に入ったわけですね。

尾登 僕らが入学した七〇年代は学生運動がある程度終息してきて、「三無主義」という言葉が流行りました。無気力、無関心、無責任の世代といわれます。逆にその反動で、ノンポリでありながらも、ぬるま湯に浸かるのではなく、ちよつと危険を冒して何か試したいという気持ちはあったようですね。

当時の大学山岳部は人数が多くて、例えば剣岳の夏山合宿ではいろいろな大学がベースキャンプを張るんですが、そこでは野営する各大会がエール交換したり、もう都会と同じようなテント村だった。

藝大の山岳部はその風体からして一目でわかりましたね。流行りのきれいな山支度じゃなくて、例えばおやじの股引きをちよん切つて帽子にするとか、なんか工夫するわけですよ(笑)。

坂口 自前でつくってきちゃう。大学にはそれぞれカラーがありました。東京農大などはサバイバル的に用意周到。京大山岳部は、装備なんかどうでもやってやるぞ、みたいな感じ。藝大の女子も個人的で目立っていました。

尾登 藝大の山岳部は、山を征服するということに増して、自然と一体となるというところがありますね。

坂口 そう。登っている途中も、苦しいんだけど、景色とかちらちらと見ながらね。それでテント場に着いてテントで食事したりする、そういうときの楽しく新鮮な感じが、もう何にも変えられない体験でした。それが創作するうえでの一つの土台にもなっている。

尾登 藝大山岳部では先輩・後輩という縦関係はほかよりもゆるくて、ほかの大学に見られたヒエラルキーの中でのしごきもなかった。それも特色でしょうね。もちろん、遭難の経験からしつかりした組織



学生時代に鹿島槍ヶ岳山頂にて。
後列右から坂口教授、一人おいて尾登教授。1969年

体制はあって、それをきっちり守りながらいろいろな科のいろいろな学生が訓練している。厳しいという感じよりも、とても心地よかったですですね。

黒沢ヒュッテと山岳ゼミ

坂口 長野県大町市に黒沢ヒュッテが建てられたのは一九六〇年ですが、まもなく小屋のあたりが鹿島槍スキー場になってリフトもできました。スキーには抜群の環境なので、山岳部員だけじゃなく一般にも開放されました。

尾登 マットの上で雑魚寝だし、冬は石油暖房でしたが、山小屋は相当冷える。お酒で体を温め、会話が弾むことも山小屋での楽しみ方かも知れません。

坂口 自炊ですから、食料を全部担いで持っていくんです。風呂はないけど、きれいでおいしい水が引いてある。

尾登 黒沢ヒュッテは、山に抱かれ、ゆったりとした時間の中、自然と一体となる環境と雰囲気がいいですね。デザイン科ID（機能系デザイン）の場合は、研究室の伝統行事で山岳ゼミというのが

あって、一九六三年の一回目から現在までつづいています。上野の杜でやるゼミと違って、山にこもる逃げ場のないゼミです。テーマは例えば、人工的行為であるデザインが自然とどう向き合えばいいのか、あるいはデザインの社会に向けたスタンスとか、自然観をベースに、原理的な問題をじっくりと議論しあったことが、とても印象に残ります。

坂口 僕は油画でしたが、研究室の先生が山の風景が大好きな野見山暁治先生でしたので、何度も山小屋にお連れしました。先生のスケッチに同行したり、スキーの手ほどきも行いましたが、高いところに行くにしがたがって師弟の立場が逆転することを、先生はおもしろがられていました。登山とは別にいろいろな科や学外の方がオールシーズンで利用していましたね。
尾登 山岳ゼミは例年十月や十一月、紅葉の美しい時期に行われます。また夜は満天の星の観照も格別です。漆黒の夜空の星屑の多さに学生たちはみな感激するんです。小屋の外でシユラフにもぐりこみ、寒いのにずーっと星を見ている学生もいました。後で聞くと、心の洗濯ですと聞いていました。
坂口 周囲にはキノコ類や山菜もけっこう豊富だし、イワナもいるんです。それをいろいろ採ってきて食べる。これがまたおいしい。

山登りと創造のいとなみ

坂口 卒業してから、尾登先生はイタリア、僕はドイツに勉強に行っただけです。僕は、黒沢ヒュッテ

に一番近い鹿島槍ヶ岳によく登ったのですが、自分の体力と青春をかけて登った日本の山のスケールと、憧れのヨーロッパ・アルプスのスケールとは、いったいどこが違うのだろうと、とても興味がありました。実際に、見た目やスケール感を体験してみると、結局、日本の山も相当いいスケール感だというのがわかりました。

というのも、実は登山と芸術の世界とがオーバーラップしてくるんです。西洋画はヨーロッパが本山ですから、自分が日本で勉強して身につけたものが偽物なのか本物なのか、現地で実際に確認し



てみたかったこともあります。結果は山と同じで、日本であろうと外国であろうと、そこに自分が介在すれば、変わりが無いことがわかりました。

尾登 イタリア遊学で印象的だったのは、イタリア人はとにかく主体的デザインにこだわるということです。自己の中で自由にテーマを探る（revenge || リチエルカール）。「これ以上のモノが自分でできればデザインするが、自信がなければその必要はない。いまあるよいモノを使えばいいのだから」という姿勢です。イタリアのデザインのクオリティは、デザイナー個々が持つ、モノづくりの理念をよりどころとしています。ところが、三年ぐらいい住むと、「イタリアも日本も変わらないな」という心境に行き着く。でも、違い



尾登誠一教授

はあって、それは条件に振り回されず自分でテーマを設定できる「心の余裕」だと気づくわけです。違いは自己と他者の関係性に対する意識の違いであり、個として大きく現象を観るということにおいて差はない。そういう意味でも自然観は重要だと考えています。

また外国に在って気づくことは、日本人の繊細さ。これは日本人独特の美意識で、恐らく自然の中の季節の移ろいを感じるころからきているような気がします。例えば落葉の瞬間は、温度とか風のぐあいとかを植物がセンサリングしてハラツと落ちる——そうしたことへの驚きです。自然にはそういう瞬間美がたくさんあって、山小屋でそうした自然(大いなる他者)への気づきを経験したことは、亡くなられた恩師小池岩太郎先生の「デザインは愛である」という言葉にすんなりつながり、行動の基点になっているように思っています。

生物が自然の中で生きる感覚。三・一一以降、僕はこれを「生物生息勘」としています。例えば「こ



坂口寛敏教授

こに発電所を造っているの？」というのも、この「勘」だと思えます。デザインの基本はこの生物生息勘がベースにあって、命を守るとか、生物が生きるための条件を勘で察することが求められる。人間を自然の一部としない発想には思い上がりがあり、時としてしつぱ返しを受ける。自然はそんなに甘くない。とてもやさしく美しいが、人間を一瞬で抹殺する厳しさをも持っている。僕は山岳部に入って、こうした自然が秘めているさまざまな力や、その関係性を知り、それがデザイン観に連なっているような気がしています。

坂口 山は登った高さだけ下りてこなきやいけない。それで初めて登山になるのです。いつも自分が出発した地点、ゼロ次元に戻ってこないとなりません。それで初めて、人間は物が見えてくるのです。山登りはその最たる修行の場ともいえます。登ってくることで初めて、美しさと苦しさを経験し、自然の恐ろしさに敬意を表せるようになる。自然の中で人間の営

みが生み出した感性、というものが日本の文化の特徴で、それは日本の芸術や創造的な営みと一体となっていると思います。

尾登先生のおっしゃる季節の移ろいも、毎年四シーズンがめぐってゼロに戻っていくので、どの時期も平等に鮮やかになる。ここが日本の素晴らしいところ。あえて「自分」を主張しなくても自然と寄り添っていれば、大きな変化にその都度出合える。これはとても豊かな恵みなんじゃないでしょうか。

一方、西洋の文化は、自己の確

2002年、黒沢ヒュッテで開かれた山岳ゼミの面々。
前列右の黒い帽子が尾登教授



立とその解放といえますから、日本の持っているものと西洋的な文脈をいかに統合しながら国際的なステージで表現するか——これが僕らの命題ですね。

尾登 いずれにしても、僕らが山に登った経験は、アートやデザインというものに、深いところで影響を与えているようですね。藝大生たちよ、もっと山小屋を利用してください。

坂口 科を超えて素晴らしい出会いを生むクラブ活動が、今後も学園生活を豊かにしつつ盛んになることを願っています。

尾登誠一 (おのぼり・せいいち)
美術学部デザイン科機能・演出研究室教授

1948年埼玉県生まれ。73年東京藝術大学美術学部工芸科インダストリアル・デザイン専攻卒業。(伊) ジョルジオ・デクスデザインオフィス、(株) デザインオフィス BACS 勤務。85年「鳥の声を聴くための道具」でデザインフォーラム銅賞、91年(株) デザインスタジオスパイラル開設。Gマーク審査員、日本デザイン学会副会長、日本色彩学会理事を歴任。著書に『色彩のすすめ』(岩波アクティブ新書)。2002年より現職。

坂口寛敏 (さかぐち・ひろとし)
美術学部絵画科油画教授

1949年福岡県生まれ。73年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。75年同大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻修了。76年ドイツ・ミュンヘンに渡り、83年ミュンヘン美術アカデミー絵画科卒業。2007年個展「パスカルの庭・都市軸・時間軸」。13年表参道画廊にて「Field of Silence」。1973年大橋賞。99年現代日本彫刻展で東京国立近代美術館賞。2003年より現職。